

私がここにいる理由

岡 本 三 保

20 数年前の夕焼け

忘れもしない、高校3年も終わりに近くなつたころ、放課後、ふと窓から体を乗り出して見た夕日。私は、その夕日を見ながら、「きっとこの夕日のことを自分は一生忘れない。」と思い、果たして今でもはっきり覚えている。そのくらいその日の夕焼けは美しかった。

しかし、私は同時に情けなくもあつた。詩でも散文でも何でも、絵でも歌でも楽器でもとにかく何でもいいから、自分が美しいと思つたこの感動を思う存分、表現できるものを持っていたら・・・美しいものを見て、美しいとしか言えないこの自分。私は、この感動を伝えられるものを何も持っていない。

教師になって

その数年後、この職についてもその思いは変わっていない。むしろ、強くなつたかもしれない。たくさん子どもたちを前にしながら、何か足りない、何かあつたらいいのにと思い続けながら過ごしてきた。

そして、ようやく10年ほど前に見つけたもの、それが“本”だった。本なら、子どものときからずっと読んできたではないか。本を自分で書くことはできなかつたが、本の魅力を伝えることはできるのではないだろうか。ぜひ、子どもたちに伝えたい。

10年くらい前といえば、子どもの読書活動推進への追い風がすでに吹いていたころのことだ。そのころ「学校図書館法」も改正されている。多少気付くのが遅くはあつたが、その追い風も私の背中を押してくれた。

また、さらに溯つて30数年前のことになるが、小学校の卒業文集に「読書は私の心の糧だ」と書いたことを覚えている。我ながら良いことばを思いついたものだと思うが、6年生の女の子が一人で思いつくようなことばではない。そういうことばを考えつことができるように、ちゃんと導いてくれた大人がそばにいてくれたからこそのことばなのだ。

今度は、私がその役目を果たすときなのではないだろうか。その先生が私にそうしてくれたように。

それから

「朝の読書」に出合つたのもちょうどその頃で、まず「朝の読書」から始めた。「朝の読書」をするにはまず本がいる。その本をどう揃えるか。揃えたら、次はどうするか。読み聞かせ・本の紹介をしたり、子どものリクエストを聞いてみたり、研究大会に参加してみたり・・・知っている限りのことを思いつくまま、手探りしながらの実践を続けてきた。

子どもに救われる、という実感は、この職についた人なら誰でも持ったことがあると思うが、この場合もそうだった。私のこんな手探りの実践でも、「本を読む楽しさを知りました。」「先生が読んでくれる本が大好きでした。」と言ってくれる子どもたち。もうその手を取って握り締めて感謝したいくらいありがたいことば。手応えを感じる事ができた。

と同時に、責任の大きさも無力さも感じた。「本を読むのは好きではない。面白い本がない。」とってはばからない男の子。何とかしたいと思いながら、とうとう魅力的な本を手渡すことができなかった。最後まで「本を読むのが好きになった。」という言葉を受けなかったことが、今でも悔やまれる。

もっと！

こんなふうにして続けてきた実践だが、手探りにはやはり限界がある。子どものときから読んできたとは言っても、私が知っているのは、限りなくある本のなかの一部分にしかすぎない。本の選び方も手渡し方もこれでいいのだろうか。もっと何か、良いやり方があるのではないだろうか。

全国を眺めてみると、本当に恵まれた学校図書館もあるし、優れた司書教諭も学校司書もいるし、眼を見張るような実践もある。日本全国どこにいても、子どもたちは公平に教育を受けることができるはずなのに・・・私の目の前にいる子どもたちにもなんとかしたい。いつまでも手探りのままでは終わらせられない。

長くなったが、これが、私がここにいる理由である。

このような理由で、ここに来た私に、たくさんのことを教えて下さった先生方、いろいろお世話を下さった方々に、心から感謝します。ありがとうございました。

(おかもと みほ 別府大学研究生 中津市立北部小学校教諭)